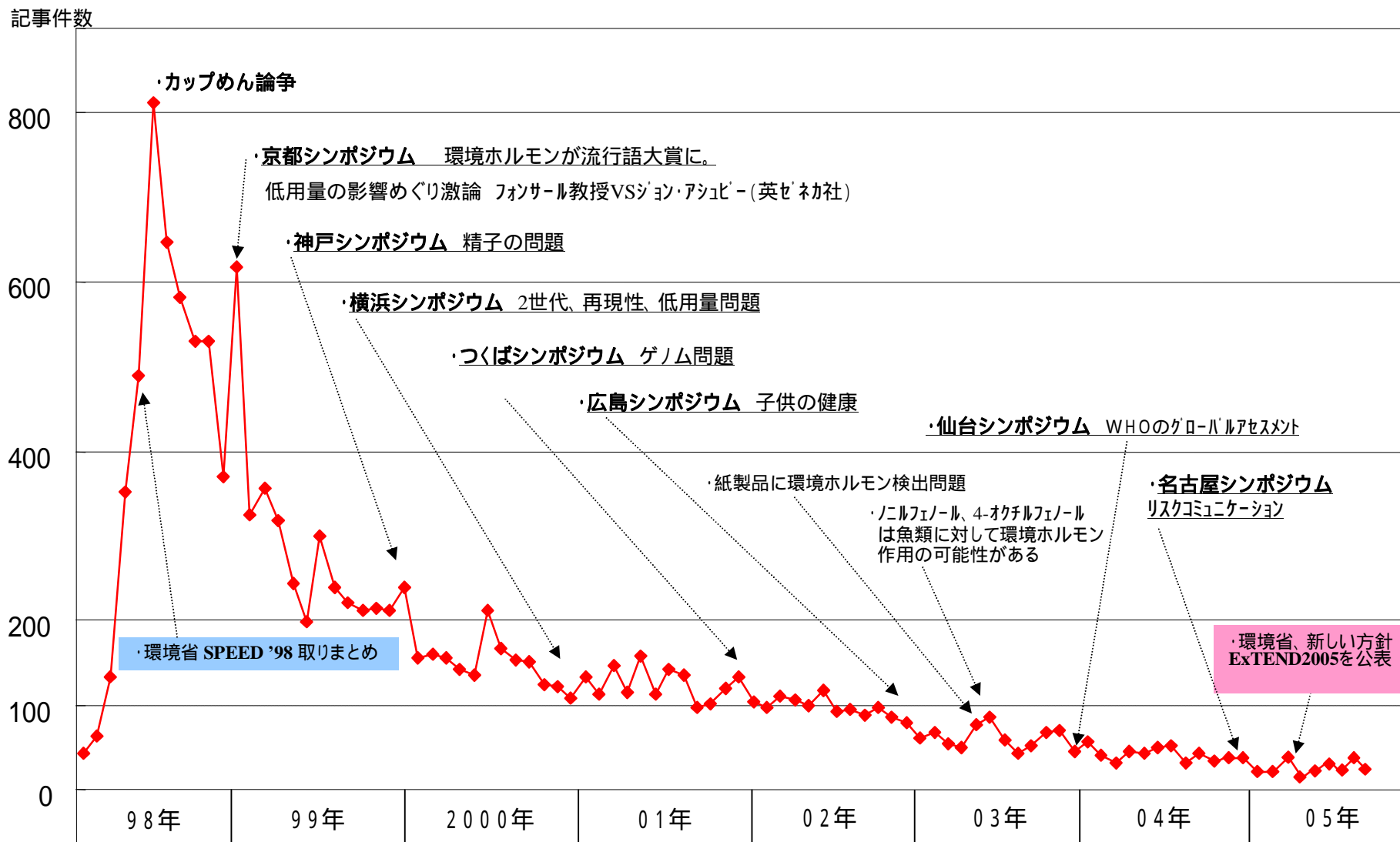


内分泌攪乱化学物質(環境ホルモン)問題

国際シンポジウムのトピックスと新聞報道記事数推移(2005年9月末日現在)



主要日刊紙(地方紙含む)、週刊誌等 51紙・誌を対象 調査:(社)日本化学工業協会

【報道本件の検索過程について】

- ・報道件数の検索に当たっては、オンラインデータベース「G-search」の新聞記事データベース・サービスを使用。
- ・「環境ホルモン」というキーワードでひと月ごとの報道件数を検索した。
- ・データベース検索可能な媒体は以下の51紙。

検索対象媒体：

「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」「産経新聞」

「日刊工業新聞・流通サービス新聞」「FujiSankei Business i . .」

「共同通信」

「北海道新聞」「東京新聞」「中日新聞」「西日本新聞」

「河北新報」「山形新聞」「下野新聞」「静岡新聞」「京都新聞」「神戸新聞」「中国新聞」「北國・富山新聞」「愛媛新聞」「高知新聞」「熊本日日新聞」「南日本新聞」「琉球新報」

「日刊スポーツ」「スポーツニッポン」「スポーツ報知」

「化学工業日報」「日本食糧新聞等3紙横断検索」「日本農業新聞」

「金融専門紙ニッキン」「日本証券新聞」「保険毎日新聞」「日刊薬業等5紙」「日刊建設工業新聞」「建設通信新聞」

「織研新聞」「住宅新報」「鉄鋼新聞」

「公明新聞」「しんぶん赤旗」

「朝鮮日報」「NNAアジア経済情報」「CHINA HEADLINE データベース」

「週刊ダイヤモンド」「週刊エコノミスト」「週刊東洋経済」「AERA」「週刊朝日」

「時事通信企業ニュース」「電気新聞」

環境ホルモンをめぐる雑誌報道の推移 (98年)

- 「ダイオキシン牛乳でわかった環境ホルモン汚染の**恐怖**」
(フライデー4月24日号)
- 「虫歯の詰め物に“**猛毒**”環境ホルモンが使われている」(週刊現代4月25日号)
- 「環境ホルモンか？ 生まれた子供の9割が女兒の村があった」(週刊現代5月2日号)
- 「忍び寄る環境ホルモンの**恐怖** 精子激減」(週刊読売5月3日号)
- 「見えない**猛毒** 環境ホルモン汚染の**恐怖**」(女性自身5月5日号)
- 「環境ホルモンという名の**悪魔** 人類を滅亡させる**狂気**の化学物質」(廣済堂出版刊)
- 「いわく**史上最悪の猛毒**、**人類絶滅の危機**」(週刊文春5月28日号)
- 「環境ホルモンは人類の『**がん**』だ ダイオキシン汚染」(週刊ポスト6月12日号)

変容する「環境ホルモン」の評価

- 1) 「性ホルモンをかく乱して、生殖異常をもたらすとされる物質」(読売新聞初報記事の表現)
- 2) 「ホルモン異常をもたらす物質」
- 3) 「危険物質」、「毒性物質」
- 4) 少年たちが「キレル」原因物質(立花隆)
- 5) 「猛毒」、「狂気の化学物質」

少年たちが切れる現象の原因か？

「環境ホルモンは人類を滅ぼす」(中央公論98年4月号)

評論家の立花隆さんと日本テレビプロデューサーの笹尾敬子さんが対談

化学物質の中には動物実験で神経系の発育が遅れたり、行動機能の障害が観察されたという報告を受けて、立花さんは、現代の少年に多発する「キレ」る現象、その結果発生する事件の原因が、環境ホルモンであると指摘した。

「環境ホルモンが神経系に影響を与えた結果として起こる、性行動以外のいろいろな行動異常 人間にもそれがめだちます」

「いまアメリカでも日本でもLDという学習障害児がすごく増えているのはこれじゃないかと思うんです」

「そうなんです。実は私も、あるいはそうじゃないかと思っていた」

科学者とメディアの違い

< 科学的事実をニュースにするにあたって、相反した視点を持っている >

科学者;

得られたデータに、それ以上のものを語らせない

プレス;

得られたデータから、目いっぱい材料を引き出そうとする

環境ホルモンのリスクとは（結果から見ると）

環境省の調査結果では（4物質にメダカなど魚類影響）

- ・ノニルフェノール
- ・オクチルフェノール
- ・ビスフェノールA
- ・DDT

このほか、ダイオキシン、PCB、トリブチルスズ、DDS、
女性ホルモン（エストロゲン）

= 人、哺乳類など他の生物影響は確認できず
不安はどうして増幅されたか？

不信が生まれる背景と、不信増幅の構造

- もんじゅ事故への技術者の対応
(うそをつく、ばれると隠す、あいまいにする)
- 環境ホルモン騒動時の日本学会議の対応(専門領域を超える総合的な対応ができない)
- 遺伝子組み換え技術、BSE対応時の説明不測
- 科学者は「水俣病」を総括できたか

社会、行政の混乱を助長してしまう

結局、ダイオキシンのリスクとは？

- Sevesoでも、結局だれも死亡しなかった
(ユーシェンコ氏は6000倍。史上2番目!?)
- 動物実験のデータが人間に転用できない？
- 日本周辺の汚染80年代が最悪、以後改善へ
(湖沼や海底汚染の原因の大半は、農薬の流入)
- 廃棄物焼却法改善など、環境中への排出はコントロール可能

(ただし、野生生物など生態系への影響を見定める必要)

ダイオキシン問題を再考する

<メディアの反省>

- 所沢ダイオキシン報道番組を、すべてのメディアが学んだか
- すべてのメディアが、科学情報の扱い方を洗練させる必要

<前進>

- 女性の感覚的告発、「複合汚染」領域に陽を当てる
- 廃棄物処理の方法が改善(焼却条件など)
- 環境化学物質への関心、研究、予算が増大
- メーカーに情報開示、説明の姿勢(科学者、技術者)
- リスク評価の普及、市民理解・参加への一歩

<混乱、疑問>

- メディアの特色と役割を、市民は理解したか？
- 調査の結果 実質的なリスクは否定された
- 「研究・調査」に膨大な費用と時間
- 白身魚や母乳は大丈夫？ 不安の増大
- 「焚き火」「野焼き」は本当に止めるべきなのか？

混乱の背景は、なにか

- これらの背景に、明治以来の教育フレーム
- 文科系、理科系の断絶と、科学離れ
- 科学者、技術者は誰のために働くか？ 科学の役割の変遷を意識しているか？
- 科学の恩恵を受ける市民には、その現状を検証する責任もある。その自覚があるか
- 英語(ヨーロッパ言語)の科学理解と、日本語の科学理解(ナノテクノロジー = 超微細加工技術) 科学修辞学の貧困

FBR「もんじゅ」のナトリウム漏出事故

(高速増殖炉原型炉 1995年12月08日)

< 事故の発生 > 12月8日夜。二次系ナトリウム配管から漏出(約640キロ・グラム)。

- 1) 初動対応の失敗。停止時期の遅延。火災発生。換気による建屋内外への拡散。火災報知機による混乱。
- 2) 1時間40分後に手動停止。
- 3) 科技庁、地元への連絡遅れ。
- 4) ナトリウム火災対策の不十分さを露呈

(2005年5月30日 もんじゅ訴訟の最高裁判決予定)

VTR 隠蔽問題 (これが最大の失策)

12月9日午前2時ころ、事故後6時間半の時点で内部の現場を撮影していた(約10分間)。

- しかし当初、VTRの存在を否定。隠した。
- 福井県が存在を指摘、周囲の疑問でようやくVTRの存在を認める。
- しかし、作為的な編集テープ(1分、4分)を提示。
- 12月20日、10分テープの存在が明るみに
(何を、隠したかったのか、そのメリットは?)

虚偽の情報提供、これが墓穴を掘る結果に。 事
故から事件に

原子力技術開発の経緯

1956年 原子力委員会発足 (53年、アイゼンハワー国連総会で核平和利用宣言)

- 57年に最初の臨界 (東海村 J P R - 1)
- ウラン (U 2 3 5 燃料は0.7% 3-4%へ)
- 残りのU 2 3 8 は燃料のPu 2 3 9 へ
- 「もんじゅ」 F B R 原型炉 1985年から6000億円を投入、
- 実験炉 (常陽) 原型炉 (もんじゅ) 実証炉
- もんじゅ、95年臨界、その直後事故
- ところが、国際的な「事故評価尺度」(IAEA)では「1」

国際原子力事象評価尺度 (INES)

レベル		基準1: 所外への影響	基準2: 所内への影響	基準3: 深層防護の劣化
事故	7 深刻な事故	放射性物質の重大な外部放出/ヨウ素131等価で数万テラベクレル以上の放射性物質の外部放出		
	6 大事故	放射性物質のかなりの外部放出/ヨウ素131等価で数千から数万テラベクレル相当の放射性物質の外部放出		
	5 事業所外へのリスクを伴う事故	放射性物質の限定的な外部放出/ヨウ素131等価で数百から数千テラベクレル相当の放射性物質の外部放出	原子炉の炉心や放射性物質障壁の重大な損傷	
	4 事業所外へのリスクを伴わない事故	放射性物質の少量の外部放出/法定限度を超える程度(数ミリシーベルト)の公衆の被ばく	原子炉の炉心や放射性物質障壁のかなりの損傷/従業員の致死量被ばく	
異常な事象	3 重大な異常事象	放射性物質の極めて少量の外部放出/法定限度の10分の1を超える程度(10分の数ミリシーベルト)の公衆の被ばく	重大な放射性物質による汚染/急性の放射性障害を生じる従業員被ばく	深層防護の喪失
	2 異常事象		かなりの放射性物質による汚染/法定の年間線量限度を超える従業員被ばく	深層防護のかなりの劣化
	1 逸脱			運転制限範囲からの逸脱
尺度以下	0 尺度以下		安全上重要ではない事象	
評価対象外			安全性に関係しない事象	

「事象」と「事故」

Incident = 「事象」

Accident = 「事故」

ちなみに、「もんじゅ事故」は「事象1」だった

チェルノブイリ事故 = 7 (事故)

Three Mile Island Accident = 5 (事故)

JCO臨界事故 = 4 (事故)

(当時の須田理事が、福井県議会で「今回の事象」と答弁し、事故の深刻さを隠蔽しようとしている、と批判を浴びた)

「もんじゅ」での再出発

1) 「もんじゅ」への見学を増やした

10年間に 85000人余の市民が原子炉見学

2) ナトリウム訓練施設での、市民実験教室

Naを切る、燃焼させるなどを、実際に実験

3) 少人数の集会に技術者派遣

(サイクルミーティング 10年間に519回)

Keyword for Communication;

体験、そして技術者の素顔

体温を感じ取ること 顔が見える

2005年改修工事着工、2008年初頭、運転再開

リスク・コミュニケーションの課題

- 背景に国民のリスク感覚のひずみがあるのでは？
 - リスクを定量的にとらえる感覚をいかに醸成するか
 - 「絶対安全」(ゼロ・リスク)の呪縛から脱するには
 - 「安全 = 安心」ではない難しさ
 - メディアにも自覚が必要
 - ・ 「白」か「黒」か、二者択一が好きなメディアの性癖
 - ・ 社会に与える影響に対して自覚が必要
 - ・ メディアはリスクコミュニケーションの主役の一人
- 技術者と市民との協議の場を増やす